

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

一豊と掛川

その6

山内家二代目「忠義」は掛川生まれ



山内一豊と親交が深かった中村彦八家
江戸時代、寛永年間(1630年ころ)に描かれた彦八家の屋敷

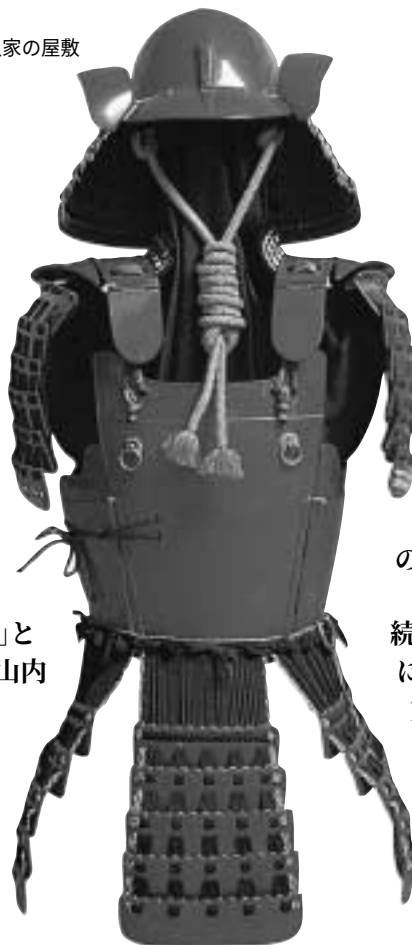


忠義公から龍尾神社に奉納された「土佐石」と「そてつ」

◆一豊の弟、康豊の長男が 家督を継ぐ

一豊は一人娘の与禰姫を長浜城倒壊の大地震で失い、後継ぎがいませんでした。文禄元年(1592)、一豊が掛川の垂木村に鷹狩りに出かけ、中村彦八方で小憩中、城中から急使が駆けつけ「康豊様(一豊の弟)に、ただいま男子が誕生」と知らされます。後の二代目当主忠義公です。

一豊は彦八の子どもたちが元気に育っているのを見て、生まれた子に名前をつけてくれるよう頼みました。彦八が「国松と命名したらいかがですか」と進言すると、一豊は大いに喜び、代々山内家の世継ぎの幼少名としました。



掛川城天守閣復元の際、山内豊秋氏から寄贈された
二代目忠義公着用の鎧

◆永い交流が続いた山内家 と掛川

忠義公は掛川で育ち、掛川天王社(龍尾神社)を産土神として崇敬しました。土佐に移ってからは、龍尾神社の分霊を高知城の東北部に勧進し、掛川神社と称しました。その当時、忠義公より奉納された「土佐石」と「そてつ」が龍尾神社の社殿の脇に現存しています。毎年春になると、「そてつ」の美しい緑色の新芽が芽吹き、永い時のつながりを静かに語っています。

その後、掛川と山内家とは、永い交流が続き、享和2年(1802)の掛川地方の凶作時には、山内家から300両を10年賦払いで貸し付けてくれた話が伝わっています。

平成6年(1994)、掛川城天守閣が本格木造で復元されて以来、山内家から寄進された忠義公の鎧が、天守閣に展示されています。山内家を継いで400年後の今、天守閣に登る人たちと一緒に掛川の町を眺めています。

(監修：掛川市郷土研究会連絡協議会)